東京大学 THE UNIVERSITY OF TOKYO　EMP Executive Management Program

東大EMP第6期プログラム
最終報告発表　概要

（2012年3月10日）

チーム・メンバー	課題テーマ	タイトル	概要
[チーム1] 鬼丸　淳 加藤　拓 鶴岡　将司 堀田　直志 山元　正人 吉仲　範恭	健康的で活力のある超高齢化社会経営	Age Barrier-free Community －長寿大国日本の道標－	「高齢者対策」については過去から必要性が叫ばれ実際に国や自治体をはじめ各方面で政策が推進されてきた。他方で、「2060年までに65歳以上の人が約4割まで増加していく」という人口推計が公表され、「超高齢化社会」をいかに経営するかがますます注目されている。 我々はその経営の本質を高齢者のみの問題としてとらえては解決に至らないと判断。どんな社会を作りたいのか、問題は何なのかをあらためて整理し、解決の方向性を課題設定とソリューションスペースで示す。 さらに、団塊の世代を起点として働き方やコミュニティの在り方など三つのステップからなる取り組みがつながりを持ってソリューションスペースへの対応となり、超高齢化社会経営の形となることを示す。
[チーム2] 小島　英昭 西條　光彦 柴田　勉 森田　拓記 安武　竜太	資源・エネルギー活用の規律による環境保全	「環境・エネルギー技術創造立国―日本」～ピンチをチャンスへ！	CO_2排出量の増大等に伴う地球温暖化問題は人類共通の深刻な課題であるが、CO_2削減に向けた取り組みを見てみると、京都議定書による枠組みは、アメリカや欧州といった先進諸国、経済発展を続けるBRICsなどの新興国が、それぞれ国益を主張する中、国際強調が進まず、暗礁に乗り上げた。日本でも、東日本大震災・福島原発事故の影響を受け、エネルギー政策（特に電力エネルギー）の再考を迫られており、CO_2削減目標達成の目途も立たない状況である。 当発表では、資源の中で環境問題解決に向けて大きな鍵となる電力エネルギー問題に特にフォーカスし、昨今の電力を取り巻くパラダイム転換を踏まえて、国内の電力エネルギー政策の再構築、発電・送電・電力消費の全体最適を図り、日本の全産業が成長できる環境を構築することなど、電力供給消費システムの構造的問題から生じる課題の解決に向けたソリューション・スペースを提示する。 その上で、日本の国力を高めながら、環境保全としてのCO_2削減を進めつつ、同時にアジア、そして世界へと環境保全と国益の両立に悩む世界各国に対するショーケースとなり、世界各国の課題解決を日本がリードしていくという好循環を生み出し得るビジョンを提示したい。

[チーム3] 梅宮　真 中埜　聖子 増田　剛 松井　俊明 吉村　一元	経済・金融分野の貢献と影響力の制御	人間の際限なき欲望との共生	人間の際限なき欲望が持続可能な社会を脅かす原因となっているにもかかわらず、我々は依然として有効な対応策を見い出せていない。しかしながら、この欲望が、経済発展のエンジンとなり、我々に様々な恩恵をもたらしている以上、単純に欲望を抑え込めばいいということではない。欲望がもたらすマイナス面を抑えつつ、プラス面が享受できる社会をいかに設計していくか、換言すれば人間の際限なき欲望といかにうまく付き合っていくかが我々の課題である。 この際、マネーの偏在（グローバルインバランス）が拡大する中、このミスマッチを繋ぐのが金融の役目であるものの、金融が本来の役目を十分に果たせていないがゆえに、マネーの暴走を許してしまう構図がある。 人間の際限なき欲望との共生には、金融の本来の役目に立ち返るとともに、マネーと実体経済とのリンケージの確保や、市場参加者の自己規律への訴求が当面の鍵である。加えてより本質的には、公共の利益と個人の尊厳のバランスの見直しといった価値観の転換が必要となる。
[チーム4] 黒川　かこ 志方　比呂基 柴田　優 白井　勝己 中山　理映子 堀内　勉	多様な宗教、文化、政治を前提とした共通行動規範確立	″Respect and Action Dynamics on Empathy″	人類が地球上に誕生して数百万年の時を経て21世紀に突入した今でも尚、ボスニア紛争など戦争や人道に対する罪は無くならなず、人類共存に向けた先人達の共通の行動規範の模索は未だ成就していない。排他性を内在する国や宗教などの権威による上からの「強い」規範が、逆にその阻害要因となっているのではないか。 止むことのない宗教対立や国家間の覇権主義的対立、経済システムとしての資本主義の限界に直面した今、我々は改めて「異なる宗教、文化、国家をまたがる人類共通の行動規範」を設定することの意味を問い直し、新たな視点で有効な行動規範の構築を試みる。 各宗教には、それぞれ「争いをなくし、皆が心豊かに生きる」ための「黄金律＝Golden Rule」ともいうべき共通の理念が含まれている。我々が新たな規範を考える上で、こうした共通理念をスタートとしながらも、あえて規範性は弱くても二項対立の構図を作らない、それが故に逆に浸透力のある「弱い規範」を、我々はここで『Respect＝敬意（大切に思うこと）』として設定する。 そして、この「弱い規範」を抽象化された教義や法律としてただ信奉するのではなく、人類共通の「共感」という自然科学的な知見に裏打ちされた人間の本性をベースに、具体的なアクションプランの実践を通じてこれに魂を吹き込むことにより、両者が相互に強化・補強し合い続けるというダイナミック・システムを提案する。 そして、このシステムを持続的なものとするために、自然科学の発展・普及を通じた人間の共通性に関する理解を深め実践する場としての広義の「教育」の重要性に着目する。その上で、具体的なアクションプランとしては、グローバルな対話の場の設定、言語を超えた文化・芸術活動を通じた国際交流、Respectを学ぶための身体知教育（柔道、茶道などの「道（どう）」）など、五感をもって「弱い規範」を体得・実践するための方法論を提案する。
[チーム5] 岩波　幸治 梶川　拓也 西倉　一郎 武藤　一郎 山田　洋資 渡辺　裕幸	先端科学技術の効用と新世界観の形成	21世紀の日本・世界への福島第一原発事故からの教訓	3.11の東日本大震災から一年が経った。震災、特に福島第一原発事故によってあぶり出され、今、我々が直面している課題は、持続的な社会を実現していくための「科学技術」の効用と、それを先導する「科学」の不完全さによってもたらされるリスクとの関係をどう整理し向き合うかである。これは、既に世の中で言われていた問題が顕在化したにすぎないといえるが、果たして解決の糸口はあるのか。 我々は、この問題の核心は、社会の想像力の欠如にあるという結論に至り、そのための仮説解として多様性のある社会の実現こそが好循環の源であると考えた。そうした社会の実現のためのソリューションスペースについて、我々は議論し、新たな日本の姿勢を世界に示したい。